

お部屋はアップグレード・サービスです

志村良知

北海に面したスウェーデン第二の都市ヨーテボリ。近郊にはサーブ、ボルボ、それにベアリングのSKFの本社と工場がある工業都市である。

一九九〇年代、工業製品用の特殊ラベルとその印刷インク販売を商売にしていたのでヨーテボリには何度も通った。ここでの定宿のSA S系列のホテルでは、予約した部屋より上のクラスに空きがあると無料でアップグレードしてくれるのが常だった。

その時は、日本からの出張者二人とホテルで直接合流、翌日プレゼンという変則強行スケジュールだった。貰った部屋は廊下に分厚いカーペット、部屋番号は一桁、巨大なドアを開けると豪華なスイーツが広がっている。すぐフロントに電話、「俺はこんな部屋を予約していない、間違いじゃないのか」と聞くと、「お部屋はアップグレード・サービスです」

日本からの二人も無事到着、聞けば彼らもちよっとびっくりの部屋だという。

乾杯ビールだけでの夕食後、「俺の凄い部屋に集合」と応接スペース

で明日の英語プレゼンの作戦会議とリハーサル。その後は積もる話のお楽しみタイム、フリーの北欧物専用ペイチャンネルを流し、これもフリーの三部屋分の冷蔵庫の中身を飲み干し食いつくした。

そして翌朝、フロントで地獄が待っていた。元々高級な部屋の予約だった、と部屋単価が普段の三倍位、三部屋分だから請求額は巨額である。しかしビジネスの朝が早い北欧のこと、お客様との約束時間が迫っているので押し問答している暇は無い。ここは一旦払うが、別途交渉する、と宣言してチェックアウトした。タクシーから秘書に電話で状況を伝える。

我が秘書さんに火が付いた。すぐ「間違えたのは私じゃない、お前だ」と予約センターとバトル開始。ホテル側に予約時にクラスを間違えたと認めさせ、我々の宿泊料金はいつものエコノミークラス、差額は宿泊券で返金、という交渉を成功させた。偉い。しかし、その宿泊券は使う度に何か後ろめたい思いをしたものだった。